幕末維新、留学生資料を読む

——金子堅太郎の『自叙伝綱要』と『明治四年渡米後懷旧録』を使った一試論——

塩 崎 智

は じ め に

1860、70年代、欧米に渡った日本人留学生数は700人近くにもなる。彼らは主に帰国後の業績が研究対象とされてきた。本学会でよく発表される「何某の英学」といったテーマはその一例と言える。

これだけ多くの日本人が海を渡り、現地で数年間生活していれば、日本と留学先との交流に、彼らが何らかの貢献を果たしたと考えるのは自然だと思うが、残念ながら資料の制約が非常に大きく、この分野での研究は遅れている。留学生個人の日記、書簡のような一次資料が現存するケースは少なく、伝記（自伝を含む）が研究の第一歩となる。しかし、伝記は故人の業績を顕彰あるいは強調する目的で書かれる場合が多いため、内容は虚飾されがちだ。数十年前の留学時代のことになると本人の記憶も曖昧になる。

そこで、まず伝記資料の内容を厳密に検証する必要がある。多くの記憶違いや虚飾から事実を篩い分け、述べられていない事実を浮かび上がらせなければならない。

留学生同士は現地で盛んに交流していたため、資料同士が情報を補完し合う可能性があり、丹念に集めていけば、新たな事実が見えてくることもある。ここでは、留学生資料としては例外的に情報量が豊かな金子堅太郎の2種類の自伝の内容を、金子の書簡、他の留学生関係の資料などを援用して吟味し、行間の事実を読み取ってみたい。

金子堅太郎の留学と資料

金子堅太郎は前福岡藩知事黒田長知随員として、団琢磨とともにアメリカ留学に派遣された。横浜出航は1871（明治4）年12月25日。岩倉使節団一行と同船した。サンフランシスコに翌72年1月15日に到着し、大陸横断鉄道で留学目的地ボストンへと向

かう。ボストンは、同藩の留学生、本間英一郎⁽¹⁾と井上良一⁽²⁾がすでに学んでおり都合が良かった。

ボストンに荷を解いたのは2月末～3月初頭で、井上の世話で下宿先などを手配してもらった。9月からボストン市立ライス・グラマースクール (Rice Grammar School) に入学し、74年6月に卒業。9月にはボストン市立イングリッシュ・ハイスクール (English High School) に進学するが、76年2月頃中退する。同年9月、ハーバード大学ロースクールに入学し、78年6月、法学士号を取得し、団琢磨とともに帰国する。

この留学中の経緯は自伝、『自叙伝綱要』と『明治四年渡米後懐旧録』に詳しい。『自叙伝綱要』は日本大学金子文庫に保存されており、昭和16年頃の成立と推定されている。出生から明治期までの自伝で、その後の半生には触れられていない。『明治四年渡米後懐旧録』は、留学時代のみを扱ったもので、原本はやはり日本大学金子文庫が所蔵している。作成年代は不明⁽³⁾。前者は金子の自伝として、後者は留学時代の記録として書かれたために、2種類の自伝が残っているのだろう。しかし、両資料とも留学から相当の年月を経て書かれたので、その内容の真偽に関しては相当な注意が必要だ。

金子のボストン公立学校の記録を見たいと思い、関係市当局に連絡を取ったが、100年以上前の資料は保存していないということで、残念ながら、ライス・グラマースクール、イングリッシュ・ハイスクール在籍時の金子に関する公の記録は見られなかった。

自伝の記述が正しいとすると、金子は公立学校からハーバード大学ロースクールに進学したことになる。これは異例で、資料を読んでいてまず疑問を感じたのはこの点だった。

当時、アメリカでは大学以上の教育を受けるには、大学入学用私立アカデミーで進学の勉強をするのが通例だった。金子がライス・グラマースクールに入学した時、団琢磨、岩国藩留学生、吉川重吉⁽⁴⁾、田中貞吉⁽⁵⁾も同時に4級（全部で6級、下から3番目）に入学した。金子以外の3人は大学受験用の私立アカデミーに進学したが、金子だけがライス・グラマースクール卒業後、卒業生のほぼ全員が就職する公立高校に進んだ。

1871年にハーバード大学ロースクールに入学した久留米藩留学生、山田稜養⁽⁶⁾、72年同校入学の井上良一と目賀田種太郎⁽⁷⁾も私立アカデミーを経ているし、ニューヨー

クのコロンビア大学ロースクールに75年に入学した彦根藩の相馬永胤⁽⁸⁾もそうだった。

なぜ金子だけが、このような進学コースを選んだのだろうか。

金子はスポンサーである旧藩主黒田長^{ながひろ}溥の「必ず一科の専門学を卒業して帰朝の上、皇国の官吏となりて皇室に忠勤をつくせ」⁽⁹⁾という言葉^を頂戴して留学した。金子は何を専門に考えていたのか。この点に関する唯一の記述は次の部分だ。

一ヶ年間の普通学校の課程を修了したるに依り、将来修学すへき専門（ママ）の学科を定むる必要あり。依って余は日本か海国なるか故に海軍兵学校に入学せんと欲し医師に就き相談したれば医師曰く、診察する所に依れば別に不適当なる場合はなけれとも余に頑強なる身体とも見へさるに付、貴下か海軍に従事する家柄でなければ他の専門科を選びては如何と注意せられたるに依り、父か筑前の藩政に関係したる縁故を以て法科大学に入学することに決定したり⁽¹⁰⁾。

これは73年夏のことで、金子はこの頃、ロースクール進学という進路を決定したことになる。そうであれば、この時点で私立アカデミーへの進学を考えても良さそうなものを、金子はライス・グラマースクールに残留し、卒業後、一般の就職用公立高校に進学する。

ロースクール入学に関して

金子のこの一見不可解な行動を理解するには、当時のアメリカの大学、大学院の入学条件を考慮に入れなければならない。金子が後に入学したハーバード大学ロースクールは、今でこそアメリカで1、2を争う名門ロースクールで、相当な「狭き門」である。しかし、高瀬暢彦氏の調査によれば、学士号を持たない入学希望者にラテン語や論文試験を課したのは金子が入学する翌年の1877年になってからのことだ⁽¹¹⁾。それ以前は大学卒業生でなくても無試験で入学できた。

当時のアメリカのロースクールは一般的に相当水準が低かったらしい。ハーバードの場合も、資格試験なしに学位を与えていたような有様で、オリバー・ウエンデル・ホームズ（Oliver Wendell Holmes Jr.）⁽¹²⁾は、「州の対面（ママ）を汚しかねないものとなっている」と厳しい非難の声を挙げていたほどだ⁽¹³⁾。しかし、1869年、クリストファー・ラングデル（Christopher Langdell）がロースクールのディーンに就任

するや、次々に改革を行い、学位取得には試験合格が必須条件となった。金子は、この一連のラングデル改革の最中に入学したが、うまく入学試験実施前に滑り込んだ。金子はイングリッシュ・ハイスクールには1年半しか在籍していない。2年から入学し3年の途中で退学した。この急ぎ振りは、ハーバード大学ロースクール入学試験実施の報を聞き焦ったのではないだろうか。

日本人留学生の場合、入学時に面接が課されたようだ。1872年に入学した目賀田種太郎は、ラングデルの面接を受け予備知識の有無を試された¹¹⁴。おそらくラテン語や初歩的な法知識などで、金子はこの知識の習得に高校中退後の半年を費やした。

先達、井上良一 の存在

金子は法学専攻を決めた段階で、この無試験制度を知っていたので、敢えて私立アカデミーに進む必要を感じなかったのではないか。この情報をもたらし、アドバイスを与えたのは、同郷の先輩井上良一だったと思われる。井上は72年9月、ハーバード大学ロースクールに入学すると、毎週末、金子の下宿に泊まり日曜か月曜に帰っていたという¹¹⁵。

井上はロースクールに入学する前にオリバー・ウエンデル・ホームズに個人指導を受けているが、その時、金子も井上に同行しホームズに会っている¹¹⁶。グラマースクール1年目の英語力では大した話はできなかっただろうが、この井上＝ホームズ・ラインが、金子の法学専攻決定に最も大きな影響を与えたと思われる。

井上は実は、公立校主義者だった。1872年に日本公使館書記官のチャールズ・ランマン（Charles Lanman）が出版した *The Japanese in America*¹¹⁷ には、当時の在米留学生の作文が多数収録されている。その中に井上の “Public and Private Schools” という論文がある。井上は私立学校と公立学校を比べ、アメリカの公立学校の教育は全てが平等だが、やる気と競争心を刺激する素晴らしい環境だと、公立学校の利点を強調している。ハーバードのロースクールはどうせ無試験なのだから、公立学校で教育を受け、外国人用面接対策は、半年ほど個人的にラテン語や法学の初歩を教えてもらえば十分と、井上からアドバイスを受けたのではなかっただろう。

金子は夏休みの避暑先や、知人へのクリスマス・プレゼントまで、1つ年上の井上から様々なアドバイスを得ており相当頼りにしていた。金子がその井上に進学相談をもちかけなかったはずはない。金子はロースクール時代（1876～78年）にイザベラ・

スチュワート・ガードナー（Isabella Stewart Gardner）夫人と付き合いがあったようだが¹¹⁸、彼よりも前に彼女の知遇を得たのは、井上だった。ガードナー夫人コレクションの中に、「井上六三郎源良一」と書かれた封筒が保存されている。井上は1874年に帰国するため、直接金子を夫人に紹介したかどうかは不明だが、金子は井上の伝もあり夫人と知り合えたのだろう。

この頃の留学はとにかく情報が少ない。進学先や専攻を決めるのは、右も左も分からない留学生には悩みの種だ。そんな時は経験豊かな同邦の先達の忠告が何よりも有難い。金子と共に留学した団琢磨は福岡藩の先輩留学生、本間英一郎がマサチューセッツ工科大学で鉄道学を専攻していたこともあり、その基本となる金属の鉱山学を専攻することに決めた¹¹⁹。当時の留学生の行動を考える際、先達の影響は無視できない大きな要因だった。

金子の自伝に井上は度々登場するが、あくまで脇役としてのそれである。井上は自伝、日記、書簡の類を一切残していないため¹²⁰、井上・金子の関係を検証することは不可能だが、金子の自伝を読み、周辺事項を確認しようとすればするほど大きく感じられるのが井上の存在である。自伝からは金子は自らの運命を自力で切り開いていったかのような印象を受けるが、相当親密だった先輩井上の存在は無視できない¹²¹。

19世紀アメリカ高等教育事情

留学生の研究の際に留意しなければならないのは、当時のアメリカの大学、特に大学院教育の入学資格の問題だ。

金子がライス・グラマースクールに在学中、コネチカット州ニューヘイブンから毎週末遊びにきた留学生に原六郎がいた。原はイエール大学で経済学を学んだというのだが、その事実を確認するために、原の伝記作者原邦造がイエール大学朝河貫一教授に原六郎の学籍について確認を依頼したところ、1936年、朝河から次のような返事を得た。

大学本部に尋ね候所、同氏は一八七三年に一年又は一年以内だけ暫くグラデュエート・スクールに籍を置かれ候ことの記録あるのみに候。其他に何も徴すべきものなく候由に候。今日と異りて其頃は詳細の記載を製らざりし故に候。又往年には日本遊学者に寛大にて過去の学歴の甚だ不足なるものをも入学せしめ候次第にて、

但し college は入学の試験などありて容易には入れがたく、却って其の上に立つスクールは当国何れの college の卒業者をも無試験にて収容したる時代あり。日本人の如きは、むしろ此处に容易に入れたるものに候。原氏は多分在学の間に何の試験も論文もなく、只来り去りたるものらしく候。今日とも隔世の感ある状なりしことを推するに足り候哉。

1936年当時の朝河がすでに「隔世の感あり」と驚いているように、1870年代頃のアメリカの大学院は、入学試験、定期試験、卒業試験いずれも無しの聴講学校のような教育機関が多かったようだ。ハーバード、イエールのような名門アイビーリーグも、大学院であれば、入学は至極簡単だったと考えていいかもしれない。

伝記資料などでは、一部「箔」をつける意味もあり、故人が有名大学に進学したことを強調しがちだ。小村寿太郎は、金子の1年前にハーバード大学ロースクールに入学している。当然、面接のみ無試験のはずだが、その伝記（外務省編『小村外交史』原書房、1966年）は次のようにその功を称えている。

ハーヴァード大学の規程としては、外国から来て留学するものは先ず予科に入るのを常則とし、直ちに本科に入らしむるは例外であつたが、小村がその例外の殊遇の下に予科の一箇年を履まないで直ちに本科に編入されたのは、その母校たる開成学校の当時大いに誇りとしたところであった。（p. 19）

井上や目賀田と異なり、アメリカで教育を受けていない小村は、面接で英語力ぐらゐは試されただろうが、予科とは何を指すのだろうか。しかも小村は法学士号取得に普通より1年長く3年かかっているが、この事実の説明は伝記資料ではなされていない。

金子の場合も、強調されるべきはハーバード大学ロースクール合格という「功績」より、そこで受けた知的、精神的影響、築いた人脈が彼の後半生にどのような影響を与えたかといった点にある。大日本帝国憲法草案作成、日露戦争時の在米広報外交など後の金子の活動に、留学経験が直接、間接的にどのような影響を与えていたか実に興味深い哉。

金子は帰国後、司法省に出仕する際、ドイツ帰りのドクター山脇玄が月給100円で自分が25円という差別的待遇に憤慨した。しかし、19世紀のドイツの大学は世界有数

の高等教育機関で、1880年代、当のアメリカからもベルリン大学だけで1300人以上もの留学生がいたという¹⁰⁴。両人の月給の差は、あながち理不尽でもなかったかもしれない¹⁰⁵。

お わ り に

とかく虚飾されがちな伝記資料も、内容を詳細に吟味し、各種の資料を付け合せてみると、様々な推論を可能にしてくれる。その中から事実を抽出する作業を経て、初めて歴史資料としての使用に耐えうる。

留学生研究の場合、今後大いに利用されるべきなのは、留学先に保存されている資料である。金子の場合は、師でもあり友人でもあるホームズとの往復書簡、あるいはアメリカ各地に保存されている知人との往復書簡がまとめられていて有効だ¹⁰⁶。また、金子は詩人ロングフェロー、小説家ウィリアム・ディーン・ハウエルズ、政治家ロバート・ウィンスロップなど著名人と交流があったので、アメリカ人関係の資料の開拓も期待される。

このようなアメリカ人の資料を研究することにより、金子が現地コミュニティに与えた影響という副産物も生まれるかもしれない。例えば、ホームズ関連の人脈を調べてみると、妻のファニー・ディックスウェル・ホームズ（Fanny Dickswell Holmes）や甥のエドワード・ジャクソン・ホームズ（Edward Jackson Holmes）が夫々に日本美術に関わりを持っており¹⁰⁷、金子の影響をそこに見ることも可能だ。

いずれにせよ、アメリカの研究者との協力、彼らの研究論文などは大いに役立つはずだ。本学会でも在海外資料を使った研究が続々と発表されている。海外の研究業績や資料に積極的にアプローチし、内外に埋もれた資料をこつこつと発掘しながら、歴史の隙間を埋めていく作業を進め、個人や時代の影響を拭い去った「事実」の発見心がけていきたい。

注

- (1) 本間英一郎、1853年、福岡生れ。1867年、藩費留学生としてアメリカ留学。マサチューセッツ州のマウント・プレザント・クラシカル・インスティテュート（Mt. Pleasant Classical Institute）、同州ハイランド・ミリタリー・アカデミー（Highland Military Academy）を経て、マサチューセッツ工科大学で鉄道学を専攻。日本人初の同校の卒業生で1874年帰国。碓氷峠のアプト式鉄道

建設技術者として知られる。

- (2) 井上良一、1852年、福岡生れ。1867年、本間らとともに藩費留学生としてアメリカ留学。本間と同じ私立アカデミーを経て、ハーバード大学ロースクールに学ぶ。1874年帰国。東京大学法学部の日本人初の教授となる。
- (3) 日露戦争中の事項の記述があるので、1905年以降に書かれたことは間違いない。つまり少なくとも帰国から27年経過していることになる。
- (4) 吉川重吉、1859年生れ。岩国藩主吉川経幹の三男。1875年6月、ライス・グラマースクールを卒業し、チョンシー・ホール・スクール (Chauncey Hall School) に進学。ハーバード大学カレッジ卒業。外交官となりドイツ公使館に赴任。貴族院議員。
- (5) 田中貞吉、1857年、岩国生れ。吉川の随行者として留学。私立アカデミーを経て、アナポリス海軍兵学校に学ぶ。海軍省に勤務し後に東京郵便電信学校長となる。
- (6) 山田^{いばす}稔、1850年、久留米生れ。勝海舟の海軍操練所で訓練を受け、久留米藩の軍艦の乗員となる。藩主に願い出て1870年留学。ハイランド・ミリタリー・アカデミーを経てハーバード大学ロースクールに入学。71～4年に在籍したが卒業はしていないものと思われる。75年にはボストン市内で弁護士を開業している。山田に関しては、吉村駿夫「筑後久留米藩の英学―政変の英学に及ぼせる影響―」『英学史研究』12号、pp. 236-8を参照。
- (7) 目賀田種太郎、1853年、幕臣の家に生れる。1870年、大学南校から派遣され留学。ニューヨーク州トロイ (Troy) のアカデミー、マサチューセッツ州ウエストニュートン (West Newton) のジョゼフ・アレン (Joseph Allen) が経営するアカデミーを経て72年、ハーバード大学ロースクールに入学。74年、帰国するが、翌75年、文部官僚として再渡米。文部省貸費留学生の学生監督としてニューヨーク、ボストンに滞在。日本の税関整備に貢献し、韓国に財政顧問として派遣される。
- (8) 相馬永胤、1850年、彦根生れ。1871年、藩費でサンフランシスコに留学。後にニューヨーク州ハイランドフォールズ (Highland Falls) の私立アカデミーに入りミシガン州の農学校に入学。学費不足で一旦帰国し、1874年、再び留学し、ニューヨーク州のピークスキル・アカデミー (Peekskill Academy) を経て75年、コロンビア大学ロースクールに入学。77年にはイエール大学ロースクールに進学する。79年、帰国し、専修学校 (専修大学) を設立。
- (9) 高瀬暢彦編註「初代校長金子堅太郎 明治四年渡米後懐旧録」『日本大学精神文化研究所紀要』26集、1995年、p. 85。
- (10) 高瀬暢彦編註「金子堅太郎 自叙伝 (2)」『日本大学精神文化研究所紀要』28集、1997年、p. 106。
- (11) 前掲「初代校長金子堅太郎 明治四年渡米後懐旧録」、pp. 142-3。註3参照。
- (12) オリバー・ウエンデル・ホームズ・ジュニア、1841年生れ。最高裁判事として知られる。ハーバード大学ロースクールを卒業し1867年、弁護士となるが、70年代は、「アメリカン・ロー・レビュー (American Law Review)」誌の編集や法学書の改訂に関わり、ハーバード大学の教壇に立つなど、法学者としての活動が目立つ。井上良一、金子堅太郎がロースクール入学の際、個人指

導を受けた。

- (13) 高瀬暢彦編『金子堅太郎研究 第一集』日本大学精神文化研究所研究叢書 9、2001年、p. 65.
- (14) 松木重威編『男爵目賀田種太郎』故目賀田男爵伝記編纂会、1938年、p. 40.
- (15) 前掲「金子堅太郎 自叙伝 (2)」p. 102.
- (16) 高瀬暢彦編訳「ホームズ＝金子往復書簡」『法学紀要』35巻、1984年、p. 529. 1932年1月10日、金子よりホームズ宛書簡。
- (17) Charles Lanman, *The Japanese in America* (New York: University Publishing Co., 1872), pp. 117-124.
- (18) Isabella Stewart Gardner、1840年生れ。名画収集家、ボストン社交界の女王として知られる。私邸は美術館として一般に公開されている。夫はジャック・ガードナー。金子の自伝にはジャング・ガーデナー、あるいはジック・カーデナー夫人と記されている。モースの日本講演に刺激され、世界一周の旅の途中、1883年夏に夫婦で日本を訪れた。金子は会えなかったようで、知人への手紙を通して無礼を詫言っている。
- (19) 故田男爵伝記編纂委員会編刊『男爵団琢磨伝』、1938年、1巻、p. 65.
- (20) 『東京横浜毎日新聞』(1880年5月28日)によると、金子堅太郎が井上良一の略伝を起草した旨が記されているが、未見である。また、『ジャパン・ウィークリー・メイル』(1880年6月19日)に掲載された、井上の教え子たちが記念文集を発刊したという記事には、ボストンの新聞に記載された井上の訃報記事が引用されている。ジェイムズ・カンダ (James Kanda) 氏の指摘では、『ボストン・トランスクリプト (Boston Transcript)』紙1879年3月20日ということだったが、この日付の紙面には井上の訃報記事は見当たらなかった。
- (21) 金子はボストン・ブラーミン (Boston Brahmin) という上流知識階級と積極的に交流していたことが、自伝から伺われる。金子はこのような社交振りを発揮した日本人留学生は他にいなかったと述べているが、ガードナー夫人の封筒が示唆するように、やはりこの件でも井上が先鞭をつけていたのではないか。拙著『アメリカ「知日派」の起源』平凡社選書、2001年、pp. 175-80.参照。
- (22) 原邦造編刊『原六郎翁伝』1937年、pp. 208-9.
- (23) 金子堅太郎の法学に関する研究は、高瀬暢彦日本大学法学部教授が積極的に進められている。日本大学精神文化研究所刊行の『金子堅太郎研究』は、高瀬教授のこれまでの研究の成果をまとめられたもの。日露戦争中の金子のアメリカにおける活動については、松村正義『日露戦争と金子堅太郎』新有堂、1980年、が詳しい。
- (24) 潮木守一『アメリカの大学』講談社学術文庫、1993年、p. 16.
- (25) 当時の日本人留学生の感覚でも、アメリカの大学はヨーロッパに比べると「二流」という意識が一般的だったようだ。1875年にボストン大学ロースクールに入学した菊池武夫は、父親宛の書簡に次のように記している。

「アメリカ国学校の卒業状ハ百枚貰ても心の字も目の字も云訳にハ参ませんどうしても英国学校

にて仕揚げば本統（ママ）の事に往ぬ様存します」1876年10月22日菊池長閑宛、中央大学百年史編集委員会専門委員会編『中央大学史資料集 第4集（菊池武夫関係資料 1）』1989年、p. 78.

菊池と共に同じ学校に留学していた斎藤修一郎も、「今より三十五年前の米国大学なるものは猶其稚氣を免れず、深く専門の学科を研究し、其蘊奥を極むるには甚だ不適當で、彼の独逸の如き校風を見ることは出来なかった」（武生郷友会編『斎藤修一郎先生 懐旧談』1917年、p. 73.）と述べている。

- ㉔ 金子とホームズの往復書簡は、前掲「ホームズ=金子往復書簡」が邦訳を収めている。金子が帰国後も書状を交換していたハーバード大学ロースクールのジョン・チップマン・グレイ（John Chipman Gray）教授夫妻、同大学美術史教授チャールズ・エリオット・ノートン（Charles Eliot Norton）ら宛ての書簡は、Compiled and edited by James Kanda with William A. Gifford, “The Kaneko Correspondence”, MONUMENTA NIPPONICA (Sophia University), vol. 37, No. 1-4 (1982) に収められている。

- ㉕ Fanny Dixwell Holmes, 1840年生れ。浮世絵のコレクションを持っていた。刺繍が得意で、1875以前の作と推定される作品Daisy-Field は、縦長のフレームや鳥瞰的な視点がジャポニズムの影響を受けた代表的作品の1つとして挙げられている。Christine Wallace Laidlaw, *The American Reaction to Japanese Art 1853-1876*, Ph. D. Dissertation, Rutgers, The State University of New Jersey, 1996参照。

Edward Jackson Holmes, 1873年生れ。ホームズの弟の息子。下村英時編『天心とその書簡』日研出版、1964年、には次のように書かれている。

ハーヴァード大学を卒業すると、一八九五年世界周遊旅行に旅立ち、その途次日本滞在中に日本婦人と結婚したこと、又、その滞在中に日本の美術品に少なからぬ関心をもつに至ったことなどが、後年同夫妻揃って天心を支援するに至った原因となったようである。実父早逝のため、母はボストンの素風家フィルツと再婚、後、未亡人となってから巨額の経費を天心のために支出して、ボストン美術館東洋部充実に尽すいた。（pp. 222-3.）

Critical Reading of Autobiographies of the Japanese Students Studying in the United States During Meiji Era

—In Case of Kentaro Kaneko—

Satoshi SHIOZAKI

One of the main elements which have prevented us from studying Japanese students abroad in detail during Meiji Era may be the difficulties in distinguishing the facts from pageant in their biographies and autobiographies.

For instance, Kentaro Kaneko, who studied in the United States from 1872 to 1878, has written two autobiographies. By reading them we find that Kaneko's academic background is very unique: He did not attend a private academy before entering Harvard Law School, which was very unusual then. Instead, Kaneko pursued public education. Kaneko's autobiographies or letters do not give us any reason for his choice.

Kaneko's autobiographies tell us that Ryoichi Inoue had a great influence on Kaneko. Inoue was from Fukuoka, Kaneko's hometown and he attended Harvard Law School from 1872 and 1874, when Kaneko was there. Inoue mentions in one of his writings why he preferred public education to private one. At that time Harvard Law School required no entrance examinations. There was no reason to attend an expensive private academy as long as public education could also lead him to Harvard. We can easily assume that Inoue advised Kaneko not to go to a private academy.

In Meiji Era, what seemed most helpful was the advice from other students who had already attended schools in the United States.

Though Kaneko depended much on Inoue in various ways, in Kaneko's biography Inoue is given no importance. Kaneko's biographical materials may mislead us into overestimating him. Unfortunately we fall into the same problem when we study heroes in Meiji, who tend to stimulate our patriotism. Therefore, critical reading of biographical materials must be the first priority.